

日本事情的授業における「読解」のための教室活動

ーブレインストーミング的グループワークを用いてー

Classroom Activities for “Multicultural Approach to Japanese Reading Comprehension”:
Using Brainstorming

印道緑（北九州市立大学）

INDOH Midori (University of Kitakyushu)

要 旨

本報告では、日本事情的授業の「読解」における課題達成のプロセスと、そのツールとしてのブレインストーミング的グループ活動の実践について述べる。ブレインストーミングとは、少人数のグループによって自発的にアイデアを生み出し、最終的にある課題を達成するための方法である。内容重視の読解において学習者に多様な視点を獲得させるためのブレインストーミング的活動の役割と意義に焦点を当てる。

This article describes the use of brainstorming as a learning tool and explains how students in the class complete a specific task to fulfill a particular purpose. This is all in order to achieve a better understanding of Japanese society and culture. These activities focus on the role and significance of brainstorming activities in reading comprehension classes for promoting students to gain different perspectives.

【キーワード】ブレインストーミング, 読解, 異文化理解, 多様な視点, 発想力

1. はじめに

本発表の目的は、日本社会・文化を題材とした日本事情的授業である『異文化講読』の中の「読解」部分において、どのような課題をどのような教室活動によって達成したかを、そのプロセスに焦点を当てて紹介することであった。この授業の目標は、小説、日本文化論など多様な「読解」を通して異文化グループ（留学生）がそれぞれの観点から日本を考え、新しい発見をし、最終的にある共通の理解にたどりつき、それを全体で共有することである。このような異文化理解を目的として「読解」という内容重視の教室活動を行う際に問題となるのは、読解のプロセスにおいて学生それぞれの理解がどの程度の共感を伴って、どの程度共有されているかという点である。理解は学生固有のものだから共有することにこだわる必要はないという考え方もあるが、その様々な理解を基に各自が意見をまとめ、それを発信し、学生間の討論へと発展させていくためには、相手と共有している部分がどのくらいあるのかを知っているほうが効果的だと思われる。

この「理解の共有」に至るにはどのような条件が必要なのか、また、それをどのように促進していけばいいのかという問題を中心に、「読解」の教室活動の実践をまとめた。「考え、発見し、理解し、全体で共有する」という内容重視のプロセスを進行させるツールとしてブレインストーミング的グループワークを用いた。

2.ブレインストーミング的グループワークとは何か

教室活動の実践のためのツールとして用いるブレインストーミングは、もともとはマディソン街の広告マンであった Alex F. Osborn が 1950 年代に作りだした造語であり、ビジネスやデザイン、教育など様々な分野で創造的に思考することを目的とした手法として紹介されている^(注1)。また、英語教育 (ESL/EFL) の分野でもスピーキングやライティングなどの教室活動においてブレインストーミングを応用した事例が蓄積されている^(注2)。ブレインストーミングの特徴としては次の4つの条件が挙げられる。

- 1) ブレインストーミング中は、ある意見やアイデアに対して批判したり、反対意見を述べたりしない。
- 2) 風変りなアイデアや空想的なアイデアも排除しない。
- 3) アイデアの量は多ければ多いほどいい。
- 4) あるメンバーのアイデアにほかのメンバーのアイデアを蓄積していき、より充実したアイデアを構築していく。

さらに、この4条件に加え、5番目の条件として「厳密な時間管理」を付け加えることもある。例えば、グループ活動において、様々な考えを生み出すのに5分、それを大まかな意見にまとめるのに10分、その意見を発表するのに7分というような時間管理である。ある活動において制限時間が決まっていると、そこにゲーム性が加わり、参加者はより積極性を発揮し、ゴールに向かって走ろうとする (Lupton 2012: 17)。この時間制限というプレッシャーのもとで、参加者同士がより創造的に活動を進めていくという結果がもたらされるものと考えられる (Gray 2011: 79)。

このように、自発的にアイデアを生み出し、協働的に意見を集約し、最終的に課題を達成するためのグループ活動として位置づけられるブレインストーミングを活用することによって、内容重視の「読解」のプロセスがどのように進行していくのかを以下にまとめる。

3. 授業の概要

3-1. 『異文化講読』の目的

『異文化講読』は「読解」とそのあとに続く「討論」の2つの教室活動に基づく日本事情的授業の内容となっており、それぞれの目的は以下の2点である。なお、この報告で取り上げるのは「読解」の部分である。

- 1) 第一に、日本社会・文化に関係のある文章、あるいは小説等^(注3)の「読解」のプロセスにおいて、ブレインストーミングの手法を使って学生の発想力を刺激する。それによって、日本あるいは留学生の自国、他国の文化やものの考え方の共通点、相違点等を発見させ、それらを全体で理解し、発信し、共有する。^(注4)
- 2) 第二に、「読解」の後、ブレインストーミングの手法を用いて「討論」を行い、日本社会をトピックとした「スキット」の企画、制作、発表をするという創造的な課題を与える。この課題を達成することによって学習者の多文化理解と発信力を促進するのがこの授業の最終目標である。

3-2. 授業の対象

対象となる学生は以下の通りである。

- 1) 受講留学生数は20人程度。中国、韓国、イギリス、オーストラリアの4カ国から交換留学生として派遣された短期(1年もしくは半年)在籍の留学生である^(注5)。
- 2) 中級レベル^(注6)から上級レベルまで受講留学生の日本語能力に差があるため、日本人の学生ボランティアを募集し、各グループに最低1人は入ってもらう。日本人学生は語学学習補助としてのみでなく、留学生と対等に日本文化や社会についての討論にも参加する。

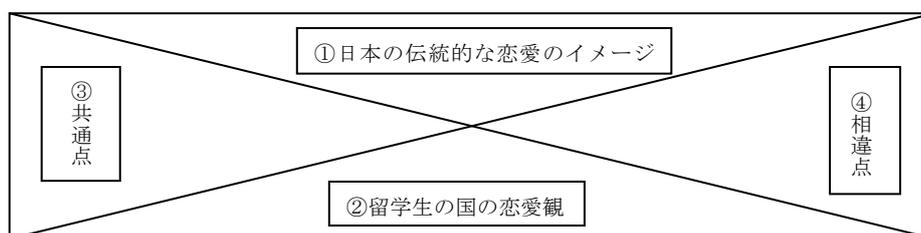
4. 「読解」におけるブレインストーミング的活動

ここからは日本社会・文化に関する「読解」部分の教室活動を例にとり、「ウォーミングアップ」、「内容把握」、「まとめと発展」の3つのプロセスにおける実際のブレインストーミング活動の手順について具体的に述べる。日本人学生を含む5人～7人程度のグループを構成した後、各グループに一人ずつ進行役としてのリーダーと、必要であれば書記を決める。活動の準備として、大判の付箋用紙(ポストイット)とできれば、各グループ用のホワイトボードを用意する。大判の模造紙やポスター用紙で代用してもいい。

4-1. ウォーミングアップの活動

この回の「読解」では森鷗外の『雁』という小説を取り上げた。まず、教師はウォーミングアップのブレインストーミング活動の準備として、「読解のトピックについて学生の発想力を刺激する」のに適当だと思われる要素を4つ程度設定する。たとえば、この読解の場合、①日本の伝統的な恋愛のイメージ、②留学生の国の恋愛観、③その(①②の)共通点、④その相違点等である。授業で教師は、まず、各グループにホワイトボード上のようなカテゴリーマップを作成するよう指示する。その際、このカテゴリーマップは視覚的に情報を分類するためであることを伝える。

図1 カテゴリーマップ1



このブレインストーミング活動の目的は、各グループが限られた時間内に、あるトピックに関して各自が持っている情報やアイデア、知識をできるだけ多く出し、それをまとめ、最後にクラス全体でそれらの情報等を共有することである。

教師はまず、各グループのメンバーに10分程度の制限時間^(注7)でこれら4つの答え(情報や知識)を付箋に書かせる。この作業は個別作業として黙って行うことを伝えておく。次に、制限時間がきたら、各グループのメンバーは自分が書いた付箋をそれぞれのカテゴ

リー欄にメンバー全員に見えるよう貼りだす。重複したアイデアがあっても必ず貼りだすことが重要である。量的にそのアイデアがどれだけ支持されているかがわかるからだ。教師は貼りだす作業においては理解を促進するため、絵や図を使ってもいいことを伝える。

その後、グループ作業に切り替える。10分程度の制限時間内に、各グループのメンバー全員でカテゴリーマップに張り出された付箋の情報の内容を確認しながら、意見交換をする。次に、5分程度の制限時間で、前の意見交換を踏まえて、リーダーを中心にカテゴリーマップを分類・整理し、仕上げる。次に、10分程度で「その結果をクラス全員の前で発表する」ための準備をする。教師は、発表する際に必ずメンバー全員が発表を分担することを伝えておく。最後に、まとめのクラス全体の活動として、各グループはクラス全員の前で発表し、質疑応答を行う。クラス全体はそれらの情報を共有することで、次の「読解」のための準備として、事前の知識や情報を補充することができる。

ブレインストーミング的活動の流れをまとめると、次のようになる。

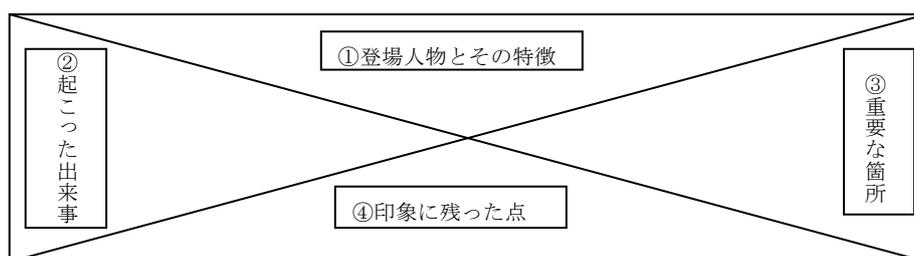
- 1) 個別活動として、カテゴリーマップ1について各自で考えてきた情報、知識、意見を付箋に書き出す。
- 2) グループ活動として、メンバーそれぞれが1)の内容を発表し、意見交換をする。
- 3) 意見交換を踏まえ、リーダーを中心にグループ全員で付箋を貼るなどして大判のカテゴリーマップ作成し、グループとしての結果をまとめる。
- 4) 3)の見解をクラス全体の前で発表する準備を行う。
- 5) 最後に、クラス全体の活動として、それぞれのグループの発表をカテゴリーマップを使って行う。次に、クラス全体で質疑応答を行い、情報や知識を共有する。

このウォーミングアップのブレインストーミング的活動の流れは、基本的に以下のどのプロセスにおいても共通して使うことができる。

4-2. 読解の内容把握における活動

次に「読解」の内容理解へ進む。読解のプロセスの活動では、まず、物語全体を読んでおくことを前提（宿題）とする。日英対訳のテキストなので、非漢字圏学生などにとって日本語で読み通すのが困難な場合は英文で読んでくることも許可する。授業では各グループの読解の担当範囲を決め、①そこに現れる登場人物とその特徴、②そこで起こった出来事（誰がなにをしたか）、③重要だと思った箇所、④印象に残った、あるいは面白いと思った点等の「読解の理解」に必要な要素を4つ程度設定する。学生はウォーミングアップの活動と同様のプロセスで、下のようなカテゴリーマップを埋めていくという作業を行い、最後に全体で発表する。

図2 カテゴリーマップ2



このブレインストーミング活動の目的は各グループが限られた時間内に、割り当てられた読解部分の情報をまとめ、一つの見解としてそこからどのような意味を引き出すかということである。この作業は先のウォーミングアップの活動より時間がかかることも考えられるので、制限時間は読解内容の難易度や分量によって加減する。最後にクラス全体の活動として、各グループの学生はクラス全員の前でカテゴリーマップを張り出し、発表する。クラス全体で情報を共有することで、ストーリー全体の理解を深めることが期待できる。

教師は次の最終段階の授業の前に宿題を2つ出しておく。1つはもう一度物語全体を読んでもおくこと、もう1つは精読のための読解シートを完成させることである。学生はこの読解シートを用いて、自分のグループが担当した部分に関してじっくり読み込み、次の4点についてまとめる。

- 1) 分からない単語や表現をピックアップし、分かりやすい日本語で書きかえる。
- 2) 担当した部分に関する質問（問題）を5つ以上作成する。
- 3) 担当した部分を140字程度に要約する。
- 4) 前の授業の活動を踏まえて自分の感想をまとめる。

この読解シートの目的は、時間をかけて読み込むことによって、カテゴリーマップ2で出された情報や感想をもう一度整理し、次の最終段階の授業の準備をさせることである。

図3 読解シート

<p>①<分からない単語、表現> 辞書で調べて、やさしい日本語に書きかえてみよう。 例：声をひそめる＝他の人にきかれないように小さい声で話すこと。</p> <p>②<質問>このストーリーについて、大切な質問あるいは面白い（ユニークな）質問を5つ作ってみよう。 例1：ここは日本のどこでしょう。 例2：〇〇ページの〇〇行の部分について、もしあなたがこの主人公だったら、どうしますか。</p> <p>③<要約>100字～140字に要約しよう。</p> <p>④<感想>あなたの感想や意見を書いてみよう。</p>

4-3. 読解のまとめにおける活動

最終段階の授業では、教師は準備として一人の学生につき○印のシールを5つずつ配付しておく。ブレインストーミング活動としては、学生はまず、宿題としてやってきた読解シートの④「各自の感想」について各グループ内で発表し、それを共有する（制限時間15分）。その後、個人活動に切り替える。各メンバーは読解シート②の5つの「質問」を各自付箋1枚に1つずつ書いて、それらをホワイトボードまたはポスター用紙に貼りだす。次に、グループ活動に切り替える。グループのメンバー全員でその中から最もいいと判断した質問を5つ選ぶ（制限時間10分～15分程度）。選ぶ方法は次のとおりである。まず、貼りだ

された質問を全員で検討する。同じ質問があれば、付箋を横に並べ、全部でいくつあるか数えておく。同じ質問が多いということは、重要度において優先順位が高いということになるからだ。次に、各メンバーは配付された5つの○印のシールをいいと思った質問の付箋に張り付ける。この投票活動によって、シールの数が多い順に上位5つの質問を選び出す。同じ数の質問があった場合は、全員で検討し、どちらかを選ぶ。最後に、5つの質問をホワイトボードまたは紙に大きく書き出す。

次にクラス全体の活動として、各グループが選択した5つの質問を全員の前に貼りだし、分かった学生に自由に回答してもらう。この活動では、学生の日本語のレベルによって考える時間にかかるので、時間制限はゆるやかなものにすることもありうる。また、オプションとして、各グループで話し合って答えを出すという活動も考えられる。

全部のグループの質問が終了したら、最後のグループ活動として、「この物語を通して著書が読者に強く訴えたかったこと」についてブレインストーミングを行う。学生は各グループに分かれ、ウォーミングアップと同様のプロセスを経て、その見解を発表する準備を行う。制限時間がきたら、クラス全体で、各グループの見解を共有し、質疑応答を行い、この読解の最終プロセスにおける理解を深める。さらに時間があれば、この最終段階の活動の続きとして、留学生の国別にこの物語のとらえ方の共通点、相違点があるかについてクラス全体で話し合うという活動も考えられる。これにより、多文化理解を促進するという「読解」授業の目標もより深く達成できるのではないかと思う。

5. 「理解の共有」のためのブレインストーミング

今回の発表の際の意見交換において最も多く出された質問の中に「読解の授業においてブレインストーミング的グループ活動が果たす特徴的な役割とは何か」というものがあった。実践発表から意見交換に至る過程を通して見えてきたブレインストーミングの役割と課題には以下の2点があげられる。

- 1) 読解の教室活動における「理解の共有」とは具体的にはどのようなことか。例えば、ある小説の主題の1つが仏教における天国、地獄を論じるものであったという場合を考えてみよう。この場合、内容の読解の前のウォーミングアップとして「あなたの国の天国、地獄のイメージはどのようなものか」といった質問をグループ内で行うという活動が考えられる。もし、あるメンバーが「自分は無宗教なので、天国や地獄は存在しない。だから、この質問に答えることはできない。」と答えたとすると、他のメンバーがこのメンバーと天国、地獄の具体的なイメージを共有することは不可能になってしまう。この発言を1つの意見としてとらえることはできるが、共有できる情報の量はかなり限られたものとなるだろう。では、ブレインストーミングでは、このような時に、次にどのような活動が考えられるだろうか。ルールに立ち返ると、ブレインストーミングにおいては、「ある意見、アイデアに対して批判的な言動をとらない。また、風変りなアイデアも排除しない。」という立場をとる。したがって、この次の質問をどのように投げかけるかが問題となる。例えば、「天国や地獄が存在しないということをイメージで表現するとどうなるか」、あるいは「あなたなりに天国や地獄を空想して、イメージを表現してみたらどうなるか」という質問をしてみるとということが考えられる。このように考えると、ブレインストーミング活動のスキルとして、

事前に質問の仕方や進め方の手順を身につけさせる必要があるということに気付く。グループのあるメンバーから、どう対応したらいいかわからないような答えが返ってきた場合、あるいは、答えが何も返ってこないというような場合に、放っておかずに次にどうつなげれば、議論が進展するかという「問題解決のスキル」をグループのメンバーの全員が身につけていることが望ましいだろう。このブレインストーミング的活動における「問題解決のスキル」の具体的内容と教え方は今後の課題である。

- 2) では、「理解の共有」に至るにはどのような条件が必要なのだろうか。第一段階として1) に述べた「共有できる情報の量」が挙げられる。社会や文化に関する文章の読解のためには、読者がそのトピックについてどの程度の知識や情報を持っているかがかぎとなる。1) で「天国や地獄は存在しない」と答えたメンバーはいろいろな文化圏における「天国や地獄」の情報やイメージを、少なくともその量においてはあまり有していないということになる。このようなメンバーでも、ウォーミングアップに続く「内容の読解」と「まとめの活動」に至るプロセスの中で、ブレインストーミング的活動による情報のやり取りによって、欠けている知識や情報を補充し、その量を増やしていくことは十分可能である。しかし、これらのプロセスを経ても、このメンバーがどうしても「天国や地獄」の存在を認めたくないという場合も想定される。このメンバーに必要なのは、「存在しない」という信念に近いものを「もしかしたら、ほかの人には存在しているかもしれない」という、より柔軟な受け取り方に変えていくことではないだろうか。そのためには自分の視点をほかのメンバーの視点、さらに多様な視点へと移行させていき、自分自身の発想力を養成することの大切さに気付く必要があるだろう。内容重視の読解における「多様な視点」と「柔軟な発想力」の大切さに気付かせる方法の研究も今後のブレインストーミングの課題である。

6. まとめ

ここまで、日本事情的授業の「読解」における課題達成のプロセスと、そのツールとしてのブレインストーミング的活動の実践について述べてきたが、ここで、改めて語学教育、特に「読解」のプロセスにおけるブレインストーミングの意義についてまとめておきたい。

ブレインストーミングとは、2章でもふれたが、「少人数のグループによって自発的にアイデアを生み出し、最終的にある課題を達成するための方法である」と定義される。これを読解の授業に置き換えると、「何らかのトピックを与えられて、意見やアイデアを述べ合い、最終的に課題を達成するための方法」になるだろう。そこで前提とされるのは、学生がそのトピックについてどの程度の知識や情報を持っているかということであった。ブレインストーミング的活動による情報のやりとりによって各自が欠けている情報や知識を補充し、多様な視点から他者の意見を受けとめることができ初めて、「考え、発見し、理解する」ことが可能になるのだと思う。「読解」の授業におけるブレインストーミング的活動の意義とは、学習者の発想力を刺激することによって、この異文化理解の過程を促進することだといえよう。

注

- (1) ラプトン (2012: 4) はブレインストーミングの効果について次のように述べている。
アイデアを探るための第一歩として有効な自由形式の発想法であり、課題をあぶり出して解決し、思考の幅を広げるのに役立つ。1950年代に考案されたブレインストーミングはクリエイティブな発想を促す技法として急速に広まり、自らをクリエイティブでないと考える人に対しても効果を発揮した。
- (2) Hall Houston(2006), Hayriye Kayi(2006), Brian Cullen(1998), Leslie Bobb-Wolff(1996)を参照。
- (3) 学習時間が少ない非漢字圏の留学生がいるため、できるだけ英語対訳付きの本を選んだ。また、小説に関しては全部読破するのは無理なので、テキストとして『Jブンガクマンガで読む 英語で味わう 日本の名作文学 12 編』（「Jブンガク」制作プロジェクト編）を使用した。その後、小説本文の分かりやすく重要だと思われる部分のみ数ページ抜き出して、読解を行った。
- (4) 学期（15週）中に15回の授業（1コマ90分）を行い、3～4回の授業で1つの読解のサイクルを終える。
- (5) 本学の短期留学生は1学期（4月～8月初旬）の4月来日の留学生と2学期（10月～2月初旬）の10月来日の留学生の2種類があり、留学期間は多くは1年だが、どちらかの学期のみ在籍の留学生もいる。
- (6) 受講留学生の日本語レベルは中級（総学習時間300～400時間程度）以上で、総学習時間が300時間に満たない初級の留学生は読解についていけないため、外した。
- (7) 以下に示した制限時間は、学生の日本語力、非漢字圏学生の有無、活動の難易度等によって加減する。

参考文献

- (1) Lupton, Ellen 編(2012)『問題解決ができるデザインの発想法』BNN 新社
- (2) Gray, Dave ほか (2011)『ゲームストーミング』オライリー・ジャパン
- (3) Hall Houston. (2006). A Brainstorming Activity for ESL/EFL Students. *The Internet TESL Journal*, Vol.XII, No.12 <<http://Iteslj.org/>>(2012年5月12日)
- (4) Hayriye Kayi. (2006). Teaching Speaking: Activities to Promote Speaking in a Second Language. *The Internet TESL Journal*, Vol.XII, No.11 <<http://Iteslj.org/>>(2012年5月12日)
- (5) Brian Cullen. (1998). Brainstorming Before Speaking Tasks. *The Internet TESL Journal*, Vol.XII, No.11, <<http://Iteslj.org/>> (2012年5月12日)
- (6) Leslie Bobb-Wolff. (1996). Brainstorming to Autonomy. *English Teaching Forum*, Vol.34, No.3 <<http://dosfan.lib.uic.edu/usia/E-USIA/forum/vols/vol34/no3/p100.htm>> (2012年9月12日)